

昭和二十四年七月 舞鶴港上陸 復員

復員後の略歴

昭和二十五年四月 島根県職員に採用

昭和五十八年三月 県職員定年退職

平成四年七月 シベリア慰霊訪問

現在は、平成七（一九九五）年から全抑協大田  
市支部長と県連合会副会長として会員の指導と会  
の運営に尽力している。

（島根県 本田 吉則）

思い出の記

入隊からシベリア抑留のトピックス

大阪府 前田 康

私は昭和十七（一九四二）年一月から入隊する  
昭和二十年三月まで西のパリと言われた満州国ハ  
ルピン市に本店を置き、日、満、支間の貿易及び  
販売（食品、酒、ビール、建材雑貨）を手広く行  
っていた光武商店に勤務していました。

昭和十九年戦局の悪化に伴い、これまで徴兵検  
査は二十歳で甲種合格者だけが現役入隊していた  
のが、この年から十九歳で検査を受け第三乙種ま  
で現役入隊することになった。

昭和二十年三月十五日にハルピンの郊外の香坊  
（ハルピン麦酒の大きな工場があった）の外れに  
所在していた関東軍第四三七〇部隊（第一装甲列  
車部隊）に現役歩兵新兵として入隊しました。昭  
和二十年八月に終戦になり、関東軍将兵は牡丹江

市郊外の海林の陸軍弾薬庫の跡地に集結させられ、私達は二十年十月中旬に、牡丹江駅からシベリアに捕虜として送られ、昭和二十二年十月に送還されて舞鶴に上陸した。帰国輸送船は病院船の高砂丸でした。帰国抑留者の宿舎で身体検査を受けましたが、身長が一七五センチ、体重は三七キロでした。

舞鶴に造られたシベリア抑留記念館や多くのシベリア抑留体験記、最近では日経新聞の「私の履歴書」に載った小堀遠州流の小堀宗家の手記等を見たり、読んだりしてきましたが、記念館では抑留生活の悲惨な場面がうまく造られており、またそれぞれの手記はその作者が体験した抑留生活の悲惨で、残酷で、ひもじい思いが書かれています。が、それを見、読んで、その度に痛切に思う事は、造られ、書かれた事は本当にその通りだが、「何かが違う」、私達が体験したシベリアの抑留生活とは「何かが違う」という思いがしてならない。

この私の手記が二年間の抑留生活を克明に書いて

たら同じ抑留体験者が読まれたら、おそらく私同様書かれた通りだが、「何かが違う」あのシベリア抑留生活の本当の状況は文章で表現される様な綺麗事では絶対になかった。と思われるだろうと想像します。

何が違うのだろうか？ 正確にここが違うという事は文章に出来ない様な気がします。ただ僅かに考えられるのは、ハルピンの生活でも零下四〇度は何べんも体験をした。軍隊でも一期の検閲までの非常に肉体的に厳しい訓練、内務班における古年兵の理由のない私的制裁でつらかった事が何遍もあった。しかし満州国へは私の意志で行った事。厳しい軍隊生活も戦時下の軍国青年としての自覚、誇りがあった。

それに対してシベリアの抑留生活には自覚も誇りも何もなかった。在るのはただ一つ、何がなんでもかんでも隣の者が亡くなっても、自分だけは一日でも早く内地（日本）に帰りたい。現在の生活では到底考える事も望む事も実感することも出

来ないほどの望郷の念の毎日の生活は、画いたり、造ったり、作文することは一応は出来ても身体の奥底から、頭から足の先までに充満した望郷の念の中でのシベリア抑留生活というものは、実際にこの様な環境の中に身を置くことでしか分明しないものだと思います。丁度アウシュビッツのユダヤ人収容所の出来事の実態はそこに身を置いた時始めて本当の感覚が分ると同じ様に。

その事が「何かが違う」と感じるものの様に思えます。

こういう感覚を前提に置かしていただいて、入隊した部隊、海林の収容所、シベリア抑留生活をトピック的に書いてみたいと思います。

#### 入隊した部隊

昭和二十年三月に関東軍第四三七〇部隊（第一装甲列車部隊）に歩兵初年兵十六人の一人として入隊しました。直ぐ隣接して第四三七一部隊（第二装甲列車隊）があり、緩やかな丘をはさんで戦後生体実験で有名になった。防疫給水部隊の石井

部隊が高い塀に囲まれて在った。ちなみにこの部隊の建物は敗戦の日（八月十五日）に非常に高い煙突と諸共に爆破されました。装甲列車部隊と言ってもほとんどの人には見た事も知識もないと思います。

簡単に説明しますと大砲、高射砲、重機関銃で武装した蒸気機関車です。

四三七〇の装甲列車の編制は、先頭又は後方に機関車、炭水車、それに牽引されて電源車、指揮車、一〇センチ加農砲車、一五センチ榴弾砲車、高射砲車二台、重機関銃車で別に弾薬、食料車（生きた豚まで）を積載する有蓋貨車多数で編制されて広大な機関区がありました。部隊の人員配置は部隊本部、歩兵、砲兵、工兵で部隊長片桐少佐以下二百三十人程度で、関東軍百万の精鋭と言われた多くの部隊の中で尻から二番目の小さな部隊で、隣の四三七一部隊が一番小さな部隊でした。

私達歩兵は各人に三八式歩兵銃と更に重機関銃が四十二銃があり、他に擲弾筒分隊がありました。

この部隊の作戦指令は機動力を生かして満州里からシベリア鉄道に入りこれを制圧することでした。日ソ友好条約がソ連により一方的に破棄された時、部隊長が部隊全員を前に「日ソ友好条約の破棄により、いよいよ最後の時が来た、これからは毎日を有意義に楽しく過ごそう」と訓令された事が印象に残っています。

#### 海林收容所

牡丹江の郊外に在った広大な敷地を持った弾薬庫跡の土塁に隔てられた弾薬庫特有のバラックが、主に北満州の関東軍将兵の收容所となり、間もなく内地へ帰る列車に乗る日を待っていた。数日ごと千人単位で牡丹江駅から列車に乗る為に收容所を出て行った。残った者も皆順番が来れば帰国列車に乗り、内地へ帰れると信じていました。

しかし誰言うともなく、内地へ帰るのでなく捕虜としてシベリアに送られるらしいとの噂が広まり、一抹の不安を抱く様になった。

こんな雰囲気の中である日、肩から参謀肩章を

吊るした参謀が来て、周囲の兵隊を集め「自分は帰国列車に同乗してウラジオストクまで行き、帰国船に兵員が乗込んで出港するのを確認して来た。皆は間違いなく順番に帰国出来るので安心して待つ様に」と説明された。

この参謀がどんな意図でこの様な説明をしたかは分明ではないが、軍隊の中での参謀の言葉は絶対で、噂は消えたが結果的には参謀にだまされ、噂が正しかった訳である。

#### 牡丹江からシベリアへ

牡丹江は山下奉文大将が軍司令官だった軍都で、海林から徒歩で牡丹江へ向う途中、周囲の山々の横腹にことごとく地下トンネルが掘られて軍の施設が造られていた。二十年十月二十日ごろに牡丹江駅から有蓋貨車に乗せられた。その時シャベルや十字鋏が沢山積み込まれるのを見て帰国船に乗るのになぜこんな物を積み込むのか疑問に思ったが、ウラジオ近くでソ連の戦勝記念塔を建設しており、日本兵に帰国に際してその建設工事を手伝

ってもらってから帰国船に乗ってもらう、との通訳の話で納得した。

夜遅く出発したが貨車の僅かな隙間から見ると列車は確かに南方向に走っているので安心して寝たが、明るくなって外を見ると今度は反対に北へ北へと走っているのではないか。皆が「列車は北へ走っているぞ、騙されたシベリアへ送られるのだ」と完全に騙された事を悟りました。

イズベストコーワヤからモシカへ

抑留生活から六十年余、年月の経過と私自身の加齢と共に、地名や年月日の記憶がおぼろげになっているが、確かイズベストコーワヤまで列車で、そこからはスチュード・ベーカーの大きなトラックと徒歩で途中二カ所の収容所に宿泊し、最後にモシカ地区（日本のブヨに似た吸血虫モシカが猛烈に多く群生しているのでこの地名になったようだ）の収容所に入った。モシカ地区には相当離れて三カ所ほど収容所があった。モシカまでの途中十一月三日に徒歩で行進していたが、既に寒さが

厳しく、その上吹雪になり非常に難渋したが、十一月三日は明治節でこの日は晴天の特異日と言われていたので、日本が負けたら天に神も仏もなくなったのか！と嘆いた記憶があります。

私達の四三七〇部隊は二百人足らずの少人数で移動単位に達しないので他の部隊に分配され、モシカの収容所に入った時には原隊に居た戦友は古年兵の上等兵ただ一人、他は全く知らない人達ばかりで、その点でも随分心細く作業の割り振りにも割を食う事が多かった。

風呂と虱

香坊の部隊を出てモシカの収容所に入った時は既にシベリアは厳寒の冬、ようやく寒さがゆるむ兆しを感じられるまで、約七カ月間、施設、環境、厳寒の条件下では一度も風呂に入る事が出来なかった。モシカから更に沿海州寄りにウルガール炭鉱があり、鉄道が通っていたが、独ソ戦のためレールが全部撤去されてヨーロッパに送られたとの事で、我々抑留者がこの鉄道復活のための枕木

を製作する木材の伐採作業に従事したが、シベリア松の松ヤニが手や顔に付き、それに焚き火の煙が、またストーブのススが付いて垢と一緒に炊事場勤務以外の者は猿顔負けの真黒の顔をしていた。七カ月間ほど風呂に入らない状態を想像して見て下さい。この様な状態の上に更に四人が一つの二段ベッドに寝る時も下着も含め全然着替える事なく過ごせば当然「虱」が猛烈に発生した。

一匹一匹取っては切りがないので闇夜の中でほのかに赤く燃えている四角のストーブの天板の上に衣服をかざしていると熱さに耐え切れずに虱が下に落ちると天板に赤い点がポ、ポと光る。文章にすると或いは幻想的と言えるかも知れないが現実には悲惨な状況である。昨晩寝る時まで生きていた隣の兵が、朝何の前触れもなく冷たくなっており、虱が一匹もいなくなっていた。と言う様な事が珍しくない状況でした。

### 食欲と性欲

人間の二大本能、食欲と性欲、正常な状態であ

れば当然な事として受け入れられている。シベリア抑留記では、先ず食欲が質と量が人為的に極端に貧しく、極端に少量とされた。その結果作業の休憩時や寝るまでの時、話題になるのは決まって郷里の名物料理。食べ物の話ばかりで「女」の話は全然出た事がない。人間食べる事がなければ色気（女）もないと言う真理を悟りました。

二年後高砂丸のタラップを昇ると白衣の看護婦さんが並んで出迎えて下さいました、その時「あ日本の女の人はこんなにも美しいのか」と思いました。この時分には、環境にある程度適応し、食事も改善されていた様に思います。

### 民主主義運動

シベリア生活になって相当の期間、旧軍の階級制がそのまま保持され、兵役期間と星の数による圧力が環境が厳しい中でお一層強く發揮されており、この制度のせいで亡くなった例も多くあった様に思います。どこから派遣されて来た左翼系？のオルグによる民主主義運動が始まったのは

いつだったかは分明ではありませんが、共産主義の教育と旧軍制度の撤廃運動でした。共産主義については、この悲惨で極端にひどい食事で何が共産主義だ。と思った者がほとんどだったと思いますが、旧軍制度（階級制度）の撤廃にはほとんどの者は大いに賛成で、オルグの後ろにはソ連の力があるので急速にこの制度は崩壊していった。スターリン大元帥にお礼状を書かされたのもこの時でした。私自身この事が生きて故郷の土を踏む事が出来た大きな要因だと今でも感謝の念を持っております。

#### パンの分配

極めて貧しい食事の中でパンが一番の生きるための糧でしたが、一日朝食に定量が三五〇グラム（ノルマ達成度で減量。後半ではノルマ制は緩和された）支給されましたが、高粱粉の水分の大きな黒パンを炊事班が一室人数各に目分量で切り分け、実に簡単な秤にかけて小さく切ったパンを一つ又は二つと木串で乗せている。水分の多い黒パンな

ので大きさに微妙に差がある。毎日替る係が自分の室の人数分を持ち帰ってから分配する方法がいかにも抑留生活の貧しさを、公平とあきらめを維持する方法によって行われます。先ずパンを板の上に何列にも並べます。二段ベッドの上から真剣な目でのパンが一番大きいか（目方ではない）を見ています。次に係が今日はこのパンからと指定します。今度はベッドの人中の人を指名します。指名を受けた者は何番ベッドの右上と指名します。これでこの指名を受けた者が係が指定したパンを取ります。この後はベッド番号の次の者が次のパンを取って行きます、人の手で分配されるパンの大小ですが、この分配方法では、どのパンが当たるかは全く分らず、不足を言えない公平とあきらめの分配方法です。自然に考え出された方法ですが、ベッドの上から食い入る様子をみている姿、究極的な分配方法を考えたのが共に成人の男子。現代に生きている人々に考えられるでしょうか。これがシベリア抑留生活の悲惨さ

と残酷で無情さを如実に表している事実だと思います。

荒れた日本海を渡り甲板から「日本だ」との呼びに甲板に駆け上がりました。波静かな舞鶴港とそれを取り囲んだ緑の山々。「日本だ。帰ってこれた嬉しい」正に感無量、ほほを流れる涙と共にシベリア抑留生活が海の向へ消えて行きました。

### 【執筆者の紹介】

生年月日 大正十四（一九二五）年二月一日

神戸市に父 文男、母 比枝

兄、姉との三人兄弟の次男として

出生

### 経歴

昭和十二年 神戸市立第一神港商業学校

入学

昭和十六年十二月 同校卒業

十七年一月 満州県哈爾濱市 光武商店

入社

二十年三月 関東軍第四三七〇部隊歩兵

現役入隊

幹部候補生 第一次合格

上等兵

二十年十月 シベリアへ

二十二年十月 舞鶴へ帰国 母の実家 岩

橋家へ

二十三年一月 大阪共栄倉庫株式会社入社

三十四年八月 同社 取締役就任

五十一年三月 取締役社長就任

平成二（一九九〇）年 退任 以降、取締役会

長、監査役、相談役

十五年十二月三十一日 引退

復員後努力され、社会のため、関西経済界のために功勞され、故郷愛媛のため、慰霊碑建立の際、高額の寄付をされ、毎年、帰省のときは慰霊碑に参拝している。

（愛媛県 山本 繁夫）